

令和7年度第3回大和市社会教育委員会議定例会（第34期） 会議録

会議名（審議会等の名称）	令和7年度第3回大和市社会教育委員会議定例会（第34期）		
開催日時	令和7年12月19日（金曜日）午後3時30分～午後5時00分		
開催場所	文化創造拠点シリウス6階 生涯学習センター601講習室		
出席状況	委員	9人：大川委員、大谷委員、小早川委員、小森委員、齋藤委員、中山委員、藤倉委員、丸田委員、山岡委員	
	関係各課	2人：文化振興課長、図書・学び交流課長	
	事務局	2人：健幸・スポーツ部図書・学び交流課学び交流係長、同係員2人 学び交流係（259-6104）	
	傍聴人数	0人	
公開・非公開の状況	<input checked="" type="checkbox"/> 公開	<input type="checkbox"/> 非公開	<input type="checkbox"/> 一部非公開
非公開・一部非公開の場合はその理由			
審議又は検討経過及び結果	<p>1 会議次第 1報告事項</p> <p>1) 文化芸術活動支援補助金およびやまと芸術文化ホール開放事業（舞台の部）（令和8年度事業分）選考結果について</p> <p>2) 令和7年度社会教育委員に関する研修会等について</p> <p>3) 第56回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会について</p> <p>2協議事項</p> <p>1) 今後の調査・研究について</p> <p>3その他</p> <p>2 審議及び結果 主な内容は次のとおり</p> <p><開会></p> <p><事務局から配布資料の確認></p> <p><議長挨拶></p> <p><報告事項></p> <p>1 報告事項</p> <p>1) 文化芸術活動支援補助金およびやまと芸術文化ホール開放事業（舞台の部）（令和8年度事業分）選考結果について</p> <p><文化振興課長より資料1について説明></p> <p>（議長）選考に出席した委員から報告事項はあるか。</p> <p>（委員）どの団体も一生懸命なので、すべての団体に補助金を出したいところだが、選ばなければならないのが難しかった。この取り組みは今後も続けてほしいと思っている。やまと芸術文化ホール開放事業は1日のみということで、もっと拡大して多くの団体に参加してもらえるとよいのではないかと思った。</p> <p>（委員）どの団体も熱心なプレゼンをされていた。これまでの活動の話を聞くと、すべての団体を支援したいと思ったが、提案内容が漠然としている団体もあった。大和市で文化芸術活動をしている団体</p>		

を市がこのような形で支援するというのはとてもよいことだと思う。基金を有意義に使うために厳格に審査することは大切なことだと感じた。審査をする上で、事前に細かい基準などの打ち合わせができていたら、よりスムーズな選考ができたのではないかと思う。

2) 令和7年度社会教育委員に関する研修会等について

＜委員より、これまでの研修会等の報告事項＞

【県社会教育委員連絡協議会研修会について】

(委 員) 第 56 回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会のリハーサルであった。研修の参加者で、全体合唱の栄光の架け橋を練習したが、本番ではとてもよくなっていたので、本番までに皆さんで練習をしたのだろうと思った。

(委 員) 川崎市のリハーサルでの発表は、社会教育委員が全然出てこないような発表であった。外国籍の方々について行政として取り組んでいる事業を報告されたが、社会教育委員の活動ではないのではないかという指摘をしたところ、本番では社会教育委員を前に出した発表になっていたので、リハーサルをやってよかったと思った。栄光の架け橋については、各自練習しておくことが宿題となっていたので、各々が練習したのだろうと思う。

【社会教育委員連絡会議について】

(委 員) 10月17日（金）に、厚木合同庁舎で開催された。厚木市、海老名市、座間市、綾瀬市、愛川町から計 29 名の出席で行われた。まず、各自治体の活動報告と情報交換が行われた。次に日本女子大学の准教授、荻野亮吾氏による「社会教育の可能性～地域コミュニティの基盤づくり～」の講演があった。最後に「地域コミュニティの基盤づくり」についてグループ協議を行った。厚木市社会教育委員は 15 名中、公募による市民が 5 名と聞き、公募の割合が高いと思った。厚木市からは 5 名の社会教育委員が会議に出席していたが、そのうち 3 名が公募による委員であった。公募動機は何だったのかという質問があり、社会教育委員と知り合ったことがきっかけで応募したとか、看護師をしているが知らない世界を知りたいと思ったという積極的な方もいた。自分は元市職員だが、公募委員だとなかなか手が上がりにくく直接お願いするということもあったので、公募の際どのような発信をしているのかわからないが、積極的な方が多いというのは意外であった。講演については、自治会や P T A などの既存組織の加入率を上げることよりも、新しいコミュニティを考えるということが今後必要なのではないかという話があった。また、そこに所属するのではなく、自分で選択して参加できるような、そういう繋がりが必要であり、まずは集まる機会を作ることが重要となる時代になってきているという話であった。地域の中で中心となる人物を発掘していく必要があるのではないかと感じた。せっかくコミュニティを立ち上げても、その人がいなくなってしまうと終わってしまう

ということもあるので、どうやって継続していくかを考えいかなければならぬと思った。社会教育委員も、そういった点では積極的に関わっていく必要があると感じた。

(委 員) この会議では毎回それぞれの自治体との情報交換を行うのだが、大和市では社会教育委員会議で作成した提言書の内容がどのように生涯学習推進計画に位置付けられているかを説明し、自分たちが行ったことを行政にしっかりと受け止めていただいているという話をさせていただいた。特に社会教育主事による支援の充実については、他自治体の計画では目を向けられていないだろうということを伝えた。一方、他自治体では地域学校協働活動事業が積極的に行われているが、大和市は現状何をしているのかがよく分からない。機会があれば、大和市はこのようなことをしているということを行政から教えていただければありがたい。県全体として地域学校協働活動事業に積極的に取り組んでいて、それぞれの特色が見えてきていると感じた。

【知ることからはじめる人権啓発研修講座について】

(委 員) 講演のタイトルが「災害発生時の人権課題を知り、考える」ということで、災害発生時における人権についての話であった。避難所では体育館の中に仕切りを作つて居住空間をつくるが、それぞれのプライバシーを守るのが難しいことや、ペットなど動物の避難場所にもなることなど、避難所についてのマイナスイメージについて、まず話されていた。そのような環境の中で、ある被災者の方がぼそっとコーヒーが飲みたと言つたという話があった。避難所ではそんな贅沢なことは言つてはいけないという雰囲気があるが、避難所でもポジティブに生活できるよう、今まで毎日コーヒーを飲んでいたのならここでもコーヒーを飲めるような環境を作つていただきたい、というような前向きな講演であった。

(委 員) 講演された日本ファーストエイドソサエティの岡野谷純さんは、40歳から救命救急の勉強をして被災地に出向いている方で、岡野谷さんから投げかけられたのは、避難所に対してどのようなイメージを持っているかということであった。トイレが使えない、雑然としている、落ち着かない、プライバシーがないなど、テレビなどの映像で見ると負のイメージがあると思うが、皆さんはどうな避難所だったらいいと思いますかという問いかけがあった。どんな避難所だったらいいかということを考えるというのは自分にとって初めての経験であった。長期的に生活する場所なので、そういったイメージを持つことが変えることの第一歩であり、与えられたもので我慢するのではなく、こういうものがあつたらいいということをみんなで意見を出し合うことで、普段と変わらない生活ができるかもしれない。コーヒーだけではなく、個々の声を吸い上げることで、今よりももっといい環境にどんどん進化していくだろうとのことであった。子ども達もどうやつたらいいと思うとか、どんなところだったらうれしいということを一緒に話してみると、こういう場所では寝ている人もいるので走り回って

はいけないのだなということを学んでいく。そういったことを気づかせること、また気づくことがとても必要なことだということをこの講演で学んだ。

(市) 先ほど、社会教育委員連絡会議の報告の中でご要望のあった、地域学校協働活動については、教育委員会の中でコミュニティスクールの動きがあるようなので、また改めて報告させていただく。

3) 第 56 回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会について

(市) 11月 20 日と 21 日の 2 日間、資料 3 の内容のとおり第 56 回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会が開催された。大会 1 日目は関内ホールで全体会、大会 2 日目は横浜市内 5 会場で分科会が行われた。全体会及び、それぞれの分科会について、委員の皆様からご報告をお願いしたい。

【全体会について】

(委員) 中華獅子舞は初めて見たが、感激した。リハーサルから見ていたのだが、高校生がとてもさわやかだった。終了後に司会者からインタビューも受けていたが誠実に受け答えしていて今の若者いいなと思った。

(委員) 1 日目の全大会は、オープニングで横浜中華学院の生徒による中華獅子舞があったが、演技がとても素晴らしかった。昨今中国との関係が少し怪しくなっているタイミングだったので、無事開催できてよかったです。このような交流を行うことは大切なことだと切に感じた。記念講演は、東京 2020 パラリンピックの閉会式を総合的に監修された栗栖良依さんによる講演であった。自らも病から障がいを負ったこともあり、「誰もが自分らしく生きることができる社会をめざして」というテーマでお話をされた。話を聞いて印象に残ったのは、ゆっくりであるがゆえにじっくり取り組むことができる、スローという言葉である。また、視点がそれぞれ違う多様性も大切にし、何事も安心安全を確保したうえでリスクのあることにチャレンジする大切さの話がとても印象に残った。シンポジウムは、青木氏、阪本氏、渡邊氏の 3 名と、伊藤コーディネーターで行われた。このシンポジウムではテーマが 4 つあったが、私が一番強く感じたテーマとトーク内容は、「学び続けることが難しい状況にある人々へのアプローチ」である。私たちも今まで家庭教育支援をテーマに取り組んできたが、用意した支援の場に出られないご家族もいらっしゃる。この方々への支援方法が命題であると前々から感じている。社会教育委員会議の役割は、学び続ける社会を作るための仕掛けづくりであり、理念の実現に向かって知恵を絞ることが大切だと思った。閉会行事では、ゆずの栄光の架橋の合唱があり、丸田議長の締めの挨拶で閉会した。帰りに小森委員から、現代では自分のために動いている、人のために生きる喜びが昭和の日本人の姿だと思うと言ってくださったのが、実は私にとって一番の学びになったような気がした。

【第1分科会について】

(委 員) 第1分科会は、関内ホールの小ホールで開催された。地域の教育力の再生と社会教育委員の役割という非常に難しい表題であった。実践事例という発表が、神奈川県海老名市と長野県下諏訪町の2つの自治体からあった。海老名市の発表では、社会教育団体の連携づくりとして取り組んでいる「えびなっ子ふれあいフェスタ」と「えびなっ子いきいきシンポジウム」の取り組みについての報告があった。えびなっ子ふれあいフェスタは、親子で社会教育活動を体験する機会の提供や、団体の活動披露の場としてダンスやサッカー、カンフーなどのスポーツだけではなく、茶道や二胡、お囃子など、幅広くフェスタの中で発表するという催しのようである。えびなっ子いきいきシンポジウムは、テーマに沿った意見交換の場として開催され、各団体間の交流、活動紹介、教育長と社会教育団体に所属する子ども達、指導者とのトークセッションなどを実施しているとのこと。また高校生、大学生にも参加してもらい、幅広い世代に交流機会を与えたようである。発表を聞いての感想は、これらのイベントは計画の立案から社会教育委員が関わり、社会教育委員が自ら主体的に事業に参加されたということが大きな成果であったという報告を聞き、素晴らしい取り組みだと評価すると同時に、社会教育委員の負担がとても大きく、今後委員が交代された時にどうなるのかと思った。いずれにしても、様々な活動を活発化するきっかけづくりになると感じた。長野県下諏訪町の発表は、全国的にも貴重な文化資産である地元の黒曜石の鉱山遺跡について、社会教育委員会議では令和3年度から遺跡を題材にどのような学びをすれば自分たちの地域に誇りを持てる物語を作り出せるかをテーマに、学びの形を探ってきたようである。社会教育委員に絵のとても上手な方、文章、ストーリーを作るのが得意な方がいたこともあり、紙芝居を作成して遺跡の古代からの物語を子ども達や地域に伝えていこうということが決まり、社会教育委員の方々が多く時間を使い議論を重ね、手作業で仕上げたようである。発表では、この紙芝居をYouTube用にアレンジしたものを紹介してくださった。今後もこの紙芝居は地域の各所で披露していくとのことである。この下諏訪町も海老名市と同様に、発案から準備、実施に至るまで社会教育委員8名全員がプロジェクトに関わったとのお話を聞き、拍手を送った。2つの発表を受けての感想としては、両団体ともに学校との連携をとても大事にしていて、先生方の理解を得て活動されていることが素晴らしいと思った。また、社会教育委員のあり方について、一つの道の定義であると思った。家庭教育支援の今後の活動を考えさせられるようなきっかけとなった。

【第2分科会について】

(委 員) 第2分科会は、「次の世代につなぐ持続可能な社会」という研究テーマで、横浜市開港記念会館の講堂で行われた。栃木県市貝町の事例発表では、「地域の若者と大人が協力して作り上げる次世

代に向けた新イベント「おかのぼ Rock Fest.」の実施について」という発表テーマで、高校生達が自主的にボランティアで、大きいロックフェスティバルを開いたという話であった。ロックフェスの名称は、会場となる市貝町町民ホール付近の土地が「城見ヶ丘」と呼ばれるため、丘に登っていったら音楽がなっていたというような感じで、「おかのぼ」と名付けられたとのこと。この地域では、もともと地域活動としてごみ拾いの活動をしてきたが、ごみ拾いだけではなく、他にも何かやりたいということでロックフェスティバルを始めることになった。高校生が主体性をもって考え方行動するという機会が少なかったが、自分たちは何がやりたいのかということから始まり、成功させたという発表であった。高校生の活動自体は素晴らしいものであったが、会長の3年生がすごいリーダーシップでまとめていったということが色濃く伝わってきたので、そのリーダーがいなくなったらどうするのだろうというのが課題だと思った。高校生の活動について残念に思ったことがある。自分たちのロックフェスは学校側が決めたボランティア活動の条件に当てはまらないのでボランティア活動としては認められないという話を聞いて、大人側は枠に当てはめてしまうというのがありがちなので、この取り組みが見直すためのきっかけになるといいと思った。高校生は、自分のためになった、モチベーションが上がったということでみんな盛り上がったということであるが、何がモチベーションになるかは人によって違うので、そのあたりは課題だと思った。2つ目の事例発表は藤沢市で、「未来を担う人材育成」～地域でつながるワカモノ×NPOインターンシップ」という発表テーマであった。NPOがインターンシッププログラムを作り活動しているが、行政がどのようにフォローアップしているかというところが見えにくかった。社会教育委員の大会なので、社会教育委員がどう関わったのかということが聞きたかった。

【第3分科会について】

(委員) 第3分科会は、「子育て・家庭教育の大切さを認識し、地域・学校など社会全体で支えるような親や子どもを支援していく取組について考える」という研究テーマで、群馬県高崎市と神奈川県寒川町から発表があった。発表後にグループ協議があり、先生方の話を聞いて終了となつたが、とてもよい話し合いができたので大変参考になった。高崎市の発表は、「「学び」を通じて親子が成長し、活躍できるための家庭支援の方策について」という発表テーマであった。教育委員会から家庭教育支援の方策についての諮問を受け、検討した結果、今求められる新たな支援、施策を推進するための体制の構築、施策の実施を可能にする人材の育成という、支援策の3本柱を導き出し、最終的に5つの提言にまとめて答申書を提出したことであった。特に気になったのは、家庭教育支援チームをつくり、そこで活動させていくという取り組みである。その中の活動として、小さな子ども達への読み聞かせや、

進学時健康診断の機会を利用して保護者対象の講座を行ったようである。子どもの健康診断は全員行くので、とても効果が出ているということであった。寒川町は、「子どもの未来を地域で育てる～公民館・図書館における家庭教育支援の取組～」という発表テーマで、図書館と公民館の2つの事例を挙げていた。公民館では、グローバル教育推進として「さわやかイングリッシュ・キャンプ」という事業を行い、学年に応じたキャンプの仕方について考えたとのこと。料理教室や科学実験教室などを行い、いろいろな経験をさせているとのこと。また、子どもの主体性の醸成を狙った「夏休み子どもフェスティバル」という事業も毎年行っているとのこと。図書館では年齢ごとに様々な取り組みをされているとのことで、ブックスタート、土曜日おはなし会、赤ちゃんタイムなど、さまざまな取り組みで子どもとの関りを深めていくという話をされていた。大和市でも多くの取り組みをしている。4か月検診でブックスタートを図書館司書とボランティアで行っている。内容としては5冊絵本を用意し、そのうち気に入った2冊をプレゼントしている。他にも年齢に応じたブックリストの配布や、図書館での読み聞かせも多くやらせていただいている。また、市民まつりの際には森のおはなし会と題して図書館がブースを設け、読み聞かせをしている。

(委 員) 高崎市では、公民館・児童館・保健センターなど、様々な施設で学びや交流の場を提供し、また学校との連携した支援事業なども実施しているが、期待する効果がまだ十分に得られていない状況であるということを話されていた。教育行政と福祉行政が連携し、市のHP以外にもSNSなど多様な方法を活用して支援情報の発信をしていった方がいいのではないかと話されていた。高崎市では、一般的に理解されている知識を得る学びではなく、人や地域とのつながりの中で生み出されるものを捉えるという考え方をしているとのこと。保護者と子ども達が様々な地域とつながることが学びの機会となると話されていた。一昔前は地域のおじいさん、おばあさんに怒られるとか、銭湯に行ってルールを学ぶとか、そのような機会が私たちの周りにはあったが、今の社会にはなかなかそういういた場所が無いので、今の時代に合うような取り組みに少しずつ変えて提供していかなければいけないのではないかというような感想を持った。社会教育だけではなく、福祉との連携を取りながら自分達の視点を広く持つことが必要だと思った。寒川町については、先ほど料理教室の話が出たが、アレルギー問題など様々な理由で料理教室に参加しない親が増えている。参加者がどのようなことを求めているのかということを情報収集し、展開していく必要があると思った。

【第4分科会について】

(委 員) 「共生社会の実現」という研究テーマで、神奈川県川崎市と茅ヶ崎市の事例発表であった。川崎市は「多文化共生社会の実現に向けて～市民館等での取組～」という発表テーマだった。1980年代

以降、教育文化会館、市民館等において「識字・日本語学級」を開設・運営してきたようである。川崎市国際交流協会の日本語講座や自主グループによる活動などの取組が行われているとのこと。また、人権学習についても、平和・人権学習を公民館で実施している。「川崎市識字・日本語学習活動の指針」が策定され、ボランティアや先生たちに配られている。識字学習活動では教えるよりもコミュニケーションを通じて、地域の中で市民主導のつながりをつくることを期待しているとのことであった。茅ヶ崎市の発表は、令和5年度の社会教育委員会議にて、委員から「社会教育の中で障がい者向けの講座はあるのか、無いのであればそういった視点も必要ではないか」という発言があったとのこと。これまで障がい者を対象にした講座の開催や、障がい者のニーズを聞き取って講座を企画することがなかった。この発言をきっかけに「障がい児・障がい者が自分らしく生きることができるために社会教育施設は何ができるか」という研究テーマを設定したこと。社会教育施設に関するアンケートを実施・検証し、「よりお互いを知り、何ができるかを一緒に考える意見交換会」を実施したり、茅ヶ崎支援学校の保護者・教員・公民館・青少年会館職員が参加するフリートーク大会「みんなのしゃべり場 with 茅ヶ崎支援学校」を開催したこと。また、障がいを持つ小学生とその家族を対象とした、子どもと大人で遊びながら音楽を楽しむ「子どももおとなもみんなで音あそび」も実施したこと。社会教育委員に特別支援学校の教員を入れることで、今まで見落としていた特別支援学校や特別支援学級の生徒にも焦点を当てることができたとのこと。今後も、すべての子ども達に目を向けて、巻き込んでいきたいということで、支援学校と連携して新しい取り組みを推進していくとのことである。自分の家の近くにも障がい者の自立支援施設があるが、昔は地域の自治会のイベントなどの際に、施設の子ども達も巻き込んで行っていたが、今はそのようなことが少なくなってきたと思っていると思う。また、昔大和市には難民支援センターがあり、自治会で多文化共生のお祭りがあったが、今は少なくなっているのではないか。学習センターでも障がい者を対象にした講座はほとんど無いのではないか。地域の力が弱くなっているのであれば、社会教育の場を活用しなければならないと思った。

(委 員) 川崎市と茅ヶ崎市の発表を聞いて、共生社会について考えるいいきっかけになった。川崎市では外国の方の生きづらさに対して支援している取り組みをされていて、茅ヶ崎市では特別支援学校の先生が社会教育委員になることで障がい者の視点を持って様々な取り組みをされていてとてもいいと思った。特に、支援級の子どもが参加できるイベントを催したということが非常に参考になった。大和市の学校でも、安心安全な学校づくりということに取り組んでいるが、子ども達にもいろいろな当たり前、いろいろな普通がある。例えば、今左利きの人は当たり前にいるが、右利きを前提とした社会になってしまっているというような生きづ

らさもあると感じている。子ども達に学校の安心安全って何?と聞いたところ、学校にあるものはすべてが硬い、椅子も机も硬いと言われたので、まず子ども達にやわらかいものを与えてみたら、落ち着く子がでてきた。例えば、柔らかい1畳ぐらいのマットをいくつも敷き詰めていき、その上に円卓を置いたら休み時間に子どもたちがそこでゴロゴロしてコミュニケーションの場になったということがある。自分の教師としての感覚という物差しではなく、いろいろな人の意見を聞いてよりよくしていくということも大切なことだということが非常に参考になった。

【第5分科会について】

(委員) 「地域学校協働活動」という研究テーマについて、新潟県見附市と神奈川県真鶴町からの発表であった。見附市は、「社会教育委員がつなぐコミュニティスクール」見附中学校の中学生ボランティアとサツマイモの栽培の農業体験をし、地域に販売するという取り組みを紹介されていた。中学生になると積極的に地域活動に出ることは少なくなると思うが、中学生の生徒会を中心に、地域の活性化につながる取り組みになっているとのことなので、大和市でもそのようなことができるといいと思った。真鶴町は、「弱みを強みに!~小さな町の挑戦~」という発表テーマであった。真鶴町には海はあるが、山や川が無いというのが弱みだが、開成町や清川村といった他自治体と連携した事業を行うことで、山や川での体験ができるようになったとのこと。学校との連携として、学童でおはなし会や折り紙をしたり、土曜教室という取り組みで外国人留学生が子ども達に英語を教えるようなこともやっているとのこと。小さい町だからこそできることもあるのかもしれない。社会教育委員が現場に行って活動し、毎年提言書を10本以上提出しているというのはすごいことだと思った。

(委員) 真鶴町は、社会教育委員が町のすべての子ども達の顔と名前が分かると話していてすごいと思った。新潟県見附市は、地域学校協働活動の中で、コアチームという中間組織と、プラットホームという仕組みを作っていて、それがうまく機能しているということであった。たくさん人が集まても話がまとまらないので、ある程度コアになる人たちが集まって方向性を決め、プラットホームというところでそれぞれの関係団体に伝えて動き出すようにしているということで、中間組織を作っているところがとても工夫されていると思った。助言者の国立教育政策研究所の藤原先生は、最初は怖そうな人だなと思っていたが、2つの自治体に対して内容を整理して、こういうところがいいと励ましの話をされていた。子どもをダシにして大人が楽しんでいますよねという話もされていて、要は大人たちが楽しめなければ長続きしないのだろうということであった。1日目のシンポジウムと2日目の分科会も、最後の質疑において地域学校協働活動についての質問が参加者から多く出ていた。どうしたら学校をうまく支援できるのかということについての質疑応答を聞いて、地域学校協働活動につい

	<p>ての認識が深まった。社会教育委員の想いも強くなっていて、学校の力になりたいという意識が高まってきているということをすごく感じた。大和市は、教育委員会が地域学校協働活動を所管しているので、なかなかうまく回りづらいかもしれないが、意識を持っていかなければならないと思った。</p> <p>2 協議事項</p> <p>1) 今後の調査・研究について</p> <p>(市) 今後の調査研究について、大和市の社会教育委員会議としてどのような取り組みをしていくかということを意見交換していただく予定であったが、時間の関係で次回会議に持ち越させていただく。11月に関プロ大会があったが、以前家庭教育支援講座をするきっかけの一つとなったのも、平成26年度に行われた関プロ大会であった。今回、関東プロ大会の分科会にご参加いただいたことで、そこに今後の調査研究テーマの種があるかもしれない。次回会議までに関プロ大会の資料をご覧いただき、2月の会議でご意見をいただきたいと考えている。</p> <p>(議長) 本日の議題は以上となる。次回会議の日程について事務局より説明をお願いしたい。</p> <p>(市) 次回、第4回定例会を2月に行う予定である。</p> <p>① 17日（火）午後3時30分から ② 18日（水）午後3時30分から ③ 19日（木）午後3時30分から ④ 24日（火）午後3時30分から 以上の候補日から選んでいただきたい</p> <p>(議長) 全員出席できる17日（火）としてよいか。</p> <p>(委員) 異議なし。</p> <p>以上で議事を終わる。</p> <p><閉会></p>
会議資料	<ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度第3回社会教育委員会議定例会（第34期）次第 ・第34期大和市社会教育委員名簿 ・文化芸術活動支援補助金およびやまと芸術文化ホール開放事業（舞台の部）（令和8年度事業分）選考結果について ・令和7年度社会教育委員に関する研修会等 ・第56回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会の資料 ・今後の調査研究について